

Title	「インワ・タウングー時代」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 28 p.61-p.88
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80446">https://hdl.handle.net/11094/80446</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「インワ・タウングー時代」

服 部 正 一

“In : wa — Taungoo Period”

by Masaichi Hattori

**ਭੀਤੀ:**

‡ මෙතැන් ෨෦ තේරුම් ගත් තේරුම් ප්‍රධාන

ဗုဒ္ဓိသောဒ္ဓါတိ ( ဂါရုတို့ ) ၂၅ - ထုံခွဲ ရေး သား ခဲ့ပြီး ဖြစ်သော "အင်း ဝ ခေတ်" ( တစိယစောဝေဇ် ) ၏ အဆက်တိုဆက်လက်၍ ဤ "အင်း ဝ - တောင်ငူ ခေတ်" ခွဲ " မှန်ကင်း တဖုညှိုင်း တဖုညှိုင်း " ဟု အဆိုရှိသကဲ့သို့ ဤကာလအတွင်း အခြား ၏ မြန်မာမင်း သက်ပြောင်းလဲခြင်း ခြေရာတိုက်စစ်၍ ဖော်ပြပါဦး မည်။

အင်း ဝ န န်း ဆက်တိုက်၍ တို့လာ ရောက်ပိုင်စိုး ပိုင်နင်း သို့လေပြီဖြစ်သောကြောင့်  
မြန်မာမျိုး တို့သတ်တောင်ငူသို့ သွား ရောက်စုပေါင်း သွ်လေသည်။ ထိုကာလအချိန်၌  
ကား တောင်ငူမှာမြန်မာမျိုး သား ဖြစ်သောမင်း ဦး ဦးအုပ်ချုပ်စွာရှိလျှင် စိုး နေ  
စဉ်ဖြစ်လေသည်။ သူ၏သား တော်တပင် ရွှေထီး အုပ်စိုး သောအခါတောင်ငူမှပဲသွား သို့  
ရွှေ့ပြောင်း သွ်လေသည်။ နောက်ဆက်အဖြစ်ဖြင့် ခေတ်၌မြန်မာပြည်သို့ ဝင်  
ရောက်လာသော ဥရောပတိုက်သား များ အကြောင်း အချက်တို့လည်း အတိုချုပ်  
ရေးသား ထား ပါဦး မည်။

နောက်တဖန်လူနဲ့သောတာလကတည်း ကအချင်း ချင်း တိုက်ခိုက်စစ်ပြိုင်လျက်ရှိနေပြ  
သောမြန်မာ-ဂွင်း - မွန်တိုင်း ယင်း လူမျိုးသုံး မျိုး အပြင်ရခိုင်နှင့်ထိုင်း ဒေသား နှစ်  
မျိုး တို့သည်လည်း ပါဝင်ဆင်နွှဲကာတဖက်တွင် ပေ၇၀၀ရှိလူမျိုး တို့လည်း ဆန်း သစ်သောလက်  
နက်များ ဖြင့်စွက်ဖက်ကာ ဂွှတ်စွေး သည်ထက်ဂွှတ်စွေး လေအောင်မြန်မာလူမျိုး တို့တို့စစ်  
မက်ဝံ့၍ ဗုဒ္ဓ၊ လွမ်း၊ မိုး ခေမဲ့လေသည်။

[illegible]

## ま え が き

学報 25 号に引続き、インワ朝がシャン系の支配者の手に落ち、ビルマ系に属する人々はタウンゲーへ蝸集して行った。本号では、インワよりタウンゲーへ、そしてまた、ペゲーへ移ってゆくビルマ族王家を中心にその変遷をたどってゆくのであるが、インワ・タウンゲー王朝との関連において、当時来緬したヨーロッパ人についても概略的に述べる。また、従来より闘争を繰り返してきたビルマ——モン——シャンの三種族にアラカン族、アユタヤー等がからみ合い、更にポルトガル人も加わり、彼らの新兵器の使用もあって、よりはげしい民族闘争をくりひろげてゆく。ビルマ三大英傑の一人と云われるタビン・シュエティ王及び彼に劣らない偉大なバイン・ナウン王の二人の目的とするビルマ国統一の理想も、所詮彼らも人間である以上、前者は性格的に、そして後者は政策的にその弱点をさらけ出し、結局ビルマ族王家も衰頹の道をたどりつつ、第二次インワ王家の復活へと入ってゆく。

## タウンゲーの位置

タウンゲーはパウンラウン河、即ち、シッタン河の中流に位する州の名で、このシッタン河の河床はイラワヂ河及びサルウイン河の間に横たわっている。パウンラウン河によって仕切られた谿谷の東部には高山があり、そこには当時も蛮族として知られていたカレン族が多数居住していた。北部から来たビルマの移住民や南部から来たモン・タライン族は丘陵地帯をカレン族に残して、この谿谷地方を占領していた。カレン族以前にこの山岳地帯に居住していたという民族の伝説は存在していないようである。

12世紀に至るまでは歴史的事件としてタウンゲーにおいて受け入れられるに足るものは原住民の編年史には何ら記されていない。この当時から4世紀間、この地の主権者は一つ乃至二つの隣接せる有力な州の運命によっていた。かくしてタウンゲーの一小地域を支配していた王朝はやがてイラワヂ河の地域一帯に及んで絶対優勢を誇るべく運命づけられていた。そして、この大変革をもたらした種々な事件をこれより述べようと思う。

## タウンゲー王朝 (1279～1530) の勃興

パガン朝48代目のナラパティ・シートゥ王の時代に有名なリンガー詩を書いたアナンタトゥリャ大臣(本名 Yanman Ngahtwē)の子孫に当る<sup>タウオン</sup>Thawon gyi: と<sup>タウオン</sup>Thawon-nge 兄弟はパガン朝52代ナラティハバテ王の時代、1279年にタウンゲーを創設した。タウンゲーは「山の突角」(Taung=「山」)+(a-)ngū=「みさき、突角」)を意味し、ウ・ミンハンの記述(p. 238)によれば、兄弟二人は<sup>ビュウ</sup>Byū-ywā と名付けられたタライン族の部落に住み、その周囲に防壁を築いた。というのはタウンゲーはタライン族の領土にもカレンニーの領土にもやや接近していた。殊にカレンニーの種族は頑強で好戦的であったからであろうと思われる。

その時より数えて30代目の王がタビン・シュエティであって、そのタウンゲー王朝は全部で36代続くのである。タウンゲーが Ketumatī というパーリ名によって有名になったのは 29 代目ミンヂーニョーの時代になってからである。

タウオンヂー、タウオンゲ兄弟がタウンゲーを創設し、支配していたけれどもピンヤ王朝時代にはピンヤに隷属し、またその後も、インワが強力であった頃はそれに隷属していた。しかし、隙を見てはインワに対し独立せんとする態度を示そうとした。また、時にはシャン族の来襲もあった。

タウンゲー王朝初期について、ウ・ミンハンの記述によれば (p. 238~240), タウンゲーを創設したタウオンヂーより <sup>ソー ウー</sup> Saw-ū: の初期には12名の支配者を数えるが、そのうち <sup>カリン バ</sup> Karinbha (1325~42), <sup>ティン ガバ</sup> Theingaba (1346~67), <sup>ピヤン チー</sup> Pyan-hkyi (1367~75), <sup>ミン バウン</sup> Min : Hpaung : <sup>カ</sup> Kā : (1383~97) 等の名が知られている。初めてタウンゲー王朝が創設された「その場所は支配者が相ついで暗殺される所となるであろう。」とタウオンヂーが予言した通り、初期支配者12名のうち7名が暗殺されている。

その事情を述べるならば、タウンゲー創設以来幾ばくも経ずして、兄タウオンヂーは弟タウオンゲによって暗殺された。タウオンゲの妻 <sup>ソー サラー</sup> Saw salā は <sup>ソー ニツ</sup> Saw-nit を生んだが、1324年、タウオンゲが亡くなったので、ソーニツを名目上の支配者として、その母ソーサラーが実権を握ったが、一年を経た頃、部下であった <sup>カリン バ</sup> Karinbha がソーニツを暗殺し、その母ソーサラーは象に乗ってタウンドウインへ逃げたが途中死亡した。そこでカリンバがタウンゲーを支配することになり、部落を治め、寺院や池を造営した。ティンガバーを制圧して、タウンゲーを平和のうちに支配した。そして90才の生涯を全うした。

その後、ティンガバーは多くの部落をよく治め、領土をンガヌエゴンまで拡張してイエフロエ五ヶ県を戦い取り、捕虜を連れ帰った。また、ビルマ、タライン、ヨンの諸族と友好関係を結んだ。

彼の後、ピヤンチーもモン族やビルマ族と親しくし、仏教を奉じ、1371年にパガンのシュエジゴン・パゴダに参拝し、寄進するなど、功德を積み、タウンゲーのよき支配者となるべく祈りを捧げ、彼の妻ソーミンを妃とせんことを祈った。時に、シャン族のビルマ諸部族に対する反抗のあることを聞き、モン・タライン族と同盟を約したため、ミンヂーゾワソーケは彼の兄に当るプロームの領主を誘って彼を襲わしめ、彼を亡ぼした。

ミン・パウンカーは知恵・勇気共に優れ、ミンヂーゾワソーケに敬意を払い、タライン族の王とも親交を保った。田畑を開発したり、功德を積むことに専心した。ピンヤの西方にあるパウンカー村に生れたので、その地にちなんで命名された。ミン・パウンカーの死後、その子ソーウが後を継いだ。1399年にインワ王ミンヂーゾワソーケはソーウがいまだ若年であるという理由で、彼を支配者の地位より下ろし、<sup>ミン</sup> Min : <sup>ネミ</sup> Nemi にタウンゲーを支配させた。後、インワのミンガウ

ン王の時代に王が幼少時代に世話になった王の守り役<sup>レツ</sup>ガキンニョー（学報22号，16頁）を Let<sup>ヤー デー</sup>-yā-gyi : の号によって支配者の地位に据えた。

それ以後 120 年以上の間インワの王はタウングーの支配者を任命することを慣例としてきた。ある時はタライン族の王を支配者としたこともある。その時にはインワに反抗したソールー・ティンカヤーが亡くなり、その養子ウザナーが後を継いだのをタライン王ビンニヤー・ランが彼を廃位し、ソールーの子ミン・ソーウをタウングーの支配者とした。しかし、4 年を経て、以前の如く、再び王位略奪事件が起り、パカン・チャービヤーが1440年ミン・ソーウを亡ぼして支配者の座に即いた。

彼の時代に占星術師で Shin Mun Yō と Shin Nyi Naung という二人は将来、東方ティッインドローの地が大国に成り、そして水曜日生れの王が3代にわたって大いに勢力を振うであろうと予言した。チャービヤーが死し、その子ミンガウンが後を継いだが、ミンゲチョーティンが彼を亡ぼしてタウングーを支配した。

ミンゲチョーティンは、ウ・ミンハンによれば (p. 241), 言葉使いや素行が悪く、8 年を経た時、その部下<sup>ンガ タン ジー</sup> Ngatanzi によって殺害された。その理由はミンゲチョーティンがある夜、<sup>ンガ タン ジー</sup>ガタンズイーの妹の寝室に入り込んだことを知った兄<sup>ンガ タン ジー</sup>ガタンズイーはミンゲチョーティンを逆襲して死に至らしめた。その後、インワ王の任命通りに、<sup>ティーリ ゼヤ トウール</sup> Thirizeyyathūr (1459 年), <sup>レツ ヤー</sup> Let-yā<sup>ザラ ティンヂヤン</sup> Zala Thingyan (1466 年), <sup>スイトウー チョー ティン</sup> Sithūkyawhtin (1470 年), <sup>スイトウー ンゲ</sup> Sithū-nge (1481 年) 等が引続きタウングーを支配した。彼らのうち特に<sup>スイトウー チョー ティン</sup> Sithūkyaw-htin はピンヤ朝のウザナー王の孫に当たる<sup>スイトウー デー</sup> Sithūgyi : と<sup>ミン デー ソファー ソー ゲ</sup> Min : gyi : Zwāsawgè の娘<sup>ソー サラー カ デウイー</sup> Sawsalāka Dewi 姫との間に生れ、インワ朝の<sup>ビスン ティー ハトウ</sup> Pyisun Thihathū 王よりドウティヤ・ミンガウン王時代に至るまでタウングーを治めた。<sup>スイトウー チョー ティン</sup> (Sithūkyawhtin については学報25号7～8頁にて既述した通りである。) インワの王たちは彼を信じ、最高指揮官の地位につけた。ウ・ミンハンの記録によれば (p. 242), シートウチョーティンはインワ王に忠誠を尽し、国内の平和の維持に努め、厳格に軍律を守った。しかし、彼は残忍性を帯び、人を殺生することが多く、食欲が旺盛であった。しかし、人間の肉とはげたかの肉を食すことは避けた。生れたばかりの豚の仔を料理させ、酒の肴にすることが常であったという。また、時には人間の肉を焼かせ、いかにも旨そうな食物だ、と云って匂いを嗅いだと云われている。

1481年にシートウチョーティンはインワ朝に対し弓を引くヤメディンの太守と戦ったが、戦況不利のため捕えられた。彼の息子<sup>スイトウー ンゲ</sup> Sithūnge がタウングーを継いで支配したが、4 年を経た頃、甥に当たる<sup>ミン チー ニョ</sup> Min : kyī : nyo が<sup>ソー ミン</sup> Sō : Min : 王女と結婚する許可をシートウ<sup>ンゲ</sup>に幾度も歎願したけれども許しをあたえなかったので、1485年、シートウ<sup>ンゲ</sup>はミンチーニョーによって殺害された。タウオンデー、タウオン<sup>ンゲ</sup>兄弟がタウングーを創設して以来二百年の間にタウングーの長は27代を累ねたが、そのうちの15名は暗殺の厄に遭っている。タウングーは主としてビルマ族によ

て占められた町であったという点において、その他の地方都市とは撰を異にしていた。即ち、シャン族のビルマ族に対する圧力のために上ビルマの生活に堪えられなくなったビルマ諸氏族の群はほとんど間断なく南に移動し来たりて山嶺の牙城たるこのタウングーの周辺に定住するに至ったのである。ビルマ族が初めてこの地に移住して来たのはタウングーの領主ピャンチー (Pyanhkyi, 1368~77) の時代である。ピャンチーはもとペグーよりこの地に移り来たって、支配するようになったのであるが、ハーヴィによれば (p.77), 彼と彼の妻はシュエジゴン・パゴダの碑文中に、自分たちは、サガイン及びピンヤをシャン族たちが劫掠した後、ここにのがれてきたビルマ人たちを助けてやった、ということ誇りを以て記している。彼らは、また、来世において自分たちが再び夫婦となってタウングーの地に住み、もう一度自分たちの愛するタウングーの民を治めたい、と祈願した。彼らの祈願は、その後1486年に至ってミンチーニョーが彼の母方の伯父の娘ソーミンを王妃に任じて、ピャンチー夫婦の化身となってタウングーを支配することによって実現するのである、とウ・ミンハン述べている (p. 242)。

歴代のタウングーの領主たちは自ら王を以て任じていたので、ジョビンゼイ村に金色の宮殿を構え、象舎を建て、時には白象を置くこともあった。彼らの小王座は時には父から子に受け継がれた。しかし、時として、彼らがインワに対して臣礼を怠る場合には、インワはいつでも、従来の例に見られる如く、己れの指名者を太守としてタウングーに送り、彼をしてこの地を治めしめた。

タウングーは通例ペグーと友好関係にあつて、もし侵略を行なう場合にはその対象は北方、特に、チャウセであった。タウングーでは一毛作しかとれないが、チャウセでは三毛作ができる。この豊穰なる地を手に入れるべくタウングーは常に機会をうかがっていた。

#### ミンチーニョー (Min : kyī : nyo, 1486~1531)

タウングーの勢力は漸次増大しつつあった。父王テイハトウの頃よりタウングーを支配していたシートウンゲ (Sithū-nge) の甥であった\* ミンチーニョーが彼を亡ぼし、彼に代ってタウングーを支配していたのをインワのドウティヤ・ミンガウン王はミンチーニョーが支配者としての策

---

\* ウ・ミンハンその他のビルマ史家によれば、ミンチーニョーはピンヤ王朝の「五頭の白象主」チョーゾワ王 (学報20号, 160頁) の系統に属す。ウ・ボチャでは、パガン王朝53代のチョーゾワ王 (学報18号, 73~74頁) の子孫、と記されている。

略に巧みであるという理由で彼の支配を黙認していた。ミンチーニョーはタライン族の軍が攻め寄せて来るのをよく防ぐことができたのを知って、王はあらためてタライン国境安全保持のために尽したことに對して1486年ミンチーニョーに<sup>タイーリゼヤ トウール</sup>“Thirizeyathūr” の称号と共に白傘その他王位の標章 (tan-hsā-ngā : -pā : ) を与えて正式にタウングーの「王」として認めた。

やがてミンチーニョーはタウングーの北方ペボッ川の近くにミヤワディと呼ぶ新しい町を建て、そこに移り、兵力を貯えた。そして、ヤメディンの太守が支配するイエフロエ五ヶ県を占領しようと計画した。遂にヤメディン、ピンマナーを含む五つの県を自分の手中に納めた。そこは農作物の豊かな地で、ペグー山脈よりおちる水を農業栽培に利用して年に三毛作を得た。かくして国力を増進させようとするミンチーニョーは軍力を養う補給源を得る大いなる支えを得たのである。

1492年、モン・タライン国においては、ダンマゼディ王が他界し、その子ビンニャー・ランが王位に即いた。その頃、ミンチーニョーのもとには北方一体より南方へかけて殊にタウングーへビルマ諸氏族が難をのがれて入り込んできていたので、ミンチーニョーの勢いはいよいよ盛んになってきた。そのことを知ったビンニャー・ランはミンチーニョーを屈服させようとする気配を示しはじめた。やがてモン・タライン王はタウングーを攻めたけれどもミンチーニョーの反撃にあって、退却を余儀なくされた。そのことを聞いて、インワのドゥティヤ・ミンガウン王は大いに満足し、ミンチーニョーを讃めた。

勢力が益々増大するにつれて、ミンチーニョーは今度はパウンラウン河の岸辺にドワラーワディという新しい町を興して、そこに移り住んだ。そして旧タウングーの町を父マハー・ティンチャー (Mahā Thinghkayā) に治めさせた。(当時のドワラーワディは現在のタウングーの町より東にあって、シャン族の部落であるロコッタヤーという所である。(ウ・オンマウン p. 74) ドワラーワディの町は日一日と栄えて行った。

インワの都においては、ドゥティヤ・ミンガウン王が没し、その子シュエナン・チョーシンがその後を継いでいたけれども、王家の者の反逆もあり、また、モーニン・シャン族の敵対行動のためにも政治は乱れていた。インワ周辺の領主たちやインワの宮廷に任えていた高官たちは武器を携えてミンチーニョーのもとに難を避けてきた。

1502年、遂にミンチーニョーはインワの隸属状態より明白に脱して、独立して支配しようと決心した。彼は長年の間、手中に納めることを望んでいた米倉地帯と云われるチャウセの地を遂に獲得した。と言うのは、インワにおいて、シュエナン・チョーシン王は国の乱れを失くすために、大臣高官たちと相談の結果、タウングー王ミンチーニョーへ彼の姪\* に当るミン<sup>ラ</sup>・トウオツ (Min : hla-htwot) を与え、その持参金として、チャウセはもとより、タウングーからチャウセに至る間の地域、ハーヴィによれば (p. 78), タウンニョー、ピャーガウン (チーダウンガン),

---

\* ウ・マウンダー "Tabinshwehti : Wutthudawgyi : " (P. 13) 及びウ・ミンハンでは (P. 221), シュエナン・チョーシン王の叔父サリン太守の娘と記されている。

シュエミヨ、キンター、タラインテ、ペッパイン等ヤメディンの諸部落をも彼に贈ったのである。

かつて、ペヌエゴウン（又は、ツガヌエゴウンとも呼ばれる）という村の近くのシンオン・カンドーデーにて、ペグー山脈より流れ下る水が氾濫してその附近の田畑のみならず、人や家畜まで多数死ぬという惨事が起きたので、ミンチーニョーは手兵を引きいて住民の救助に向った。その際、ペヌエゴウンの村長の娘キン・ウを知ったのであるが、この村長の娘キン・ウはその後ヤーザデウィの号と共に王妃に任ぜられ、ビルマ三大英傑の一人としてビルマ史にその名を輝かせたタビン・シュエティの母となるのである。

チェンマイはペグーと共にミンチーニョーの独立を認め、カレンニーは彼の強大なるを見てこれに臣従を誓った。彼は自ら剛勇を以て聞こえた。また、その先祖を遡って間接にパガン王家にその系譜を連ねることができた。

1530年、ミンチーニョー王が72才の臨終に際して、タウングーの北6マイルの所にあるペヌエゴウン（現在ピンマナ市の南方にあるレーウェーという町に当る。）の村長の娘キン・ウとの間に生れた彼の子に “Tabin shwe hti: , 別名 Min: tayā : Shwehti:” という堂々たる名前（「黄金の傘蓋」を意味する）を与えた。ミンチーニョー、タビン・シュエティ父子は共に水曜日生れ



であったという。(U Min : Han, p. 244~45)

ミンチーニョーの息子タビン・シュエティの時代にはタウンゲーは一躍勢力を増し、やがて強大な中央集権国家を築き上げるのであるが、バイン・ナウンが王座に即く頃には真に偉大なビルマ国が誕生する、つまり、ビルマ国内の統合と共に、タイ、インド、中国の国境辺を併合するのである。文化的にも一つの頂点をむかえ、国家的発展から見れば、パガン時代以来の興隆であろう。

しかし、ミンチーニョーの死後、ビルマはタウンゲー、ペゲーをはじめとしてプローム、アラカン、及びシャン族が支配するインワ、モーニン、モーガウン、バンモー、オンバウン、ニャウンシュエ等の諸地方では群雄割拠の様相を呈した。そこでタビン・シュエティは先づビルマ国の統一を志して立上った。タウンゲーには諸方の亡命者たちが蟄集していたので、彼は兵力には事を缺かなかったし、また、上ビルマ第一の富源の地であるチャウセは彼の掌中にあった。ただ彼が全ビルマに君臨することを妨げるものはシャン族である。シャン族は到底ビルマ族とは一つになることのできない種族である。

#### Tabin Shwehti : (1531~1550)

タビン・シュエティは1531年ミンチーニョーの後を継いで14才にして王位に即いた。ウ・ミンハン (p. 245) によれば、彼はビルマ族としての誇り高く、17才の時、タウンゲーを敵視するモン・タライン族の国にあるペゲーのシュエモードー・パゴダにおいて Nā : htwin : -mingalā\* (＝耳朵に孔をあける儀式) を行なうべく騎兵隊のうちより精兵を選んで出発した。その時、タライン王タガー・ユッピがそれを知って、タビン・シュエティの周りをタライン兵に取り囲ませたが、彼は臆するところなく、取りまくタライン兵を追い散らしてタウンゲーへ帰った。この若い王の姉はダキンダー (Thahkin gyī : ) といって、バイン・ナウンの妻である。バイン・ナウンは将来ビルマにおける最も偉大な王の一人となるタビン・シュエティをよく監督し、世話した。また、タビン・シュエティも彼に恩恵を感じていた。バイン・ナウンは王族の出であるとも云われるが、また、王に任えた富裕な家庭の役人であったとも云われる。タウンゲーの王朝史によれば、彼は王族の出身ではない。(ウ・ボチャ, p. 165)

#### フローカー・トンタウンムー (Hlaw-kā : -Thon : -htaung-hmū : )

タウンゲーにて有名になった大臣であり詩人であったフローカー・トンタウンムーはミンチーニョーとタビン・シュエティの二代の王に仕え、多くの Yadu 及び Ēgyin : の詩を作った。殊にタビン・シュエティに関する ēgyin : は世に知られている。

\* Nā : -Htwin : -mingalā は昔は女子だけでなく男子もこれを行なう者が多く、彼らが成人したことを祝う儀式とされていた。耳朵に着ける耳飾りには種々な材料が用いられたが、王族は男女を問わず、黄金造りで、その上宝石で飾っていた。(ビルマ民族誌, P. 53~57参照)

タビン・シュエティ王の注意すべき3つの事項は、(1)第二ビルマ国の建設。(2)ペグー占領。(3)タイ国への進入。であった。

## 第二ビルマ国の建設

タビン・シュエティが王位に即いた頃、ビルマ国内では群雄割拠し、タウンゲー、ペグー、プローム、アラカン、インワ、モーニン、モーガウン、バーモ、オンバウン、ニャウンシュエ、等々では、それぞれの王または土侯が支配していた。パガン時代にアノーヤター王が建設した第一ビルマ国はナラティハパテ王の時代に潰滅した後、約250年間は分裂状態にあったビルマ国をタビン・シュエティ王は結集統一してビルマ民族による国を建設するため粉骨砕身の努力を為した。しかし、その成功は半ばに止まり、バイン・ナウンの時代に到って完成するのである。

## ペグー占領

タビン・シュエティ王は勇猛にして計画性に富み、1535年にはモン族の都であるペグーを猛襲し、4年間をついやして1539年にペグーを征服した。その事情をより詳細に述べるため、ウ・ミンハン (p. 246) を参照すれば、タビン・シュエティ王は三回に渡って、その義兄<sup>チョーティン</sup> \*Kyawhtin<sup>ノーヤター</sup> Nawyahtā を先頭としてペグーを攻撃した。モン・タライン軍の王タガー・ユッピには守り役(将軍)として、Binnyā : Law と Binnyā : Kyan : がいて、兵士の訓練が行き届いていたのでペグーは容易に陥落しなかった。1537年にモン・タライン王が使者をつかわしたところ、タビン・シュエティ王はそれら二人の将軍とひそかに計画を企らむように見せかけ、タビン・シュエティ王が策略を用いたのをタガー・ユッピ王は考え違いをし、ビンニャー・ロー、ビンニャー・チャン二人を処刑した。その後、1538年にタビン・シュエティ王はペグーを攻撃したが、今やビンニャー・ローとビンニャー・チャンがいなくなったタライン軍は戦力を失い、モン・タライン国王タガー・ユッピは部下と共に彼の義兄弟に当るプローム王ナラパティのもとへ逃げ込んだ。

タビン・シュエティ王は遂にモン・タライン族が所有していた三角州地帯をも手中に入れた。タビン・シュエティ王の軍はなおも猛攻の手をゆるめず、プロームまでタガー・ユッピを追い、プロームの軍と戦ったが、プロームはインワの支配者ゾーハンボワに求援した。そこで、ハンタワディ (ペグー)、プローム、インワの三国の王が結束して、タビン・シュエティ王の軍に対抗する姿勢をとった。タビン・シュエティ王は敵の水路部隊を撃破した後、一度ペグーへ帰り、そこに軍備を整えた。

このプロームの戦闘において、タビン・シュエティ王とは義理の兄に当るバイン・ナウンの勇氣について、ウ・ボチャは (p. 166~167) 次のように語っている。

バイン・ナウンはタガー・ユッピが避難したプロームの都の岸辺に達し、軍船を破壊した。部

<sup>チョーティン</sup> <sup>ノーヤター</sup>  
\* Kyawhtin Nawyahtā は後、<sup>バイン</sup> <sup>ナウン</sup> "Bayin Naung" の号と共に Hm. Yaz. では Bayin Naung Kyawhtin Nawyahtā と記されている。

下たちは、「我軍よりも10倍以上も多い敵にむかって、もし我々が敗戦すれば、河を渡って帰る船がありません」と云ったのに対して、バイン・ナウンは、「お前たちは心配する必要はない。逃げ帰る船がない方がかえって、心おきなく命を捨てて戦えるではないか。そうでなければ、この戦闘には勝てないであろう。」と云った。そうこうするうちにタビン・シュエティ王は、「敵に出遭っても戦うな、私がそこへ到着してから戦え」という伝言を送った。バイン・ナウンは、「王の栄光の故に我々はすでに戦いに勝った。」と返答した。その時、部下たちは、「我々はまだ戦ってさえないのに、何故勝ったと云われるのですか。もし我々が勝たなければ、王を欺いたことになり、王によって罰せられるではありませんか」と言うと、バイン・ナウンは、「我々が勝つことには間違いはない。勝てば我々の生命は長びくであろうし、敗ければ、命を捨てて死ぬだけだ。死んだ者を王はどうして罰することができようか。」と答えた。戦闘の結果、勝利は確実であった。

#### タガー・ユッピの最後

モン族の王トウシン・タガー・ユッピは戦象を得ようとして野生の象をわなで捕えるために単身にて深いジャングルへ入り、ある湖の所に達した時、そこで仙女に会ったということである。その仙女はやがて姿を消したが、モン王は驚愕のうちに彼の部隊へたどり着いたが、その夜、熱病に冒されて、この世を去った。1452年のことであった。今でもその土地の漁夫たちは“Po<sup>ポ</sup> Yutpi”と呼ばれる Nat を祀っている (Harvey, p. 99) とのことである。インワ王朝3代目のタヤービヤー王の場合 (学報21号, 17頁) を想起すべし。タガー・ユッピは国民や彼の部下に対して疑惑の念が強く、また、彼らを処刑することがしばしばであった、と云われている。

その後、プローム王ナラパティも時を経ずして病死し、その弟 Shin<sup>シン</sup> Thayet<sup>タイエツ</sup> は伯母に当る Thiri-bon : -htwot を妃とし、プロームを支配した。彼は将来の事情を考えて、妹である故ペグー王、即ち、タガー・ユッピの妃をアラカン王に献上し、盟友の契りを結んだ。

タウングーの町はパウンラウン河 (シッタン河) の右岸に近く、また農作物の豊かな地イエ<sup>フ</sup>ロエ五ヶ県にも遠くなかった。ペグー山脈とシャン高原の間にあったので、シッタン河の流域は河幅がさほど広くなかった。北はインワ、西はプローム、東はシャン州、南はモン・タライン族の居住地に囲まれていたので、ビルマ——シャン——モンの諸族が相接する地点にあった。しかし、タウングーは軍旗の<sup>へんぼん</sup>翻繚として翻るイラワザ河に沿っているのではなく、シッタン河によって生活を営む地域であったので可成り辺鄙な地でもあった。このように辺鄙な地であったので、タライン族とビルマ族との間に大きな戦いが起った時には自由に住める所でもあったこと。戦禍のため難をさけるモン・タライン族やビルマ族が入り込んでくる所でもあったこと。静かに鋭気を養うに適した地であったために偉大な勢力のある支配者が現われる地でもあった。そのため、シャン族がインワを劫略し、ペグーとタイ国が戦っても、また、アラカンがチタゴンを攻めても、それらの戦いに影響されなかったタウングーはビルマ国を統一する新しい都となる機会が生じて

きた。しかし、シッタン河の流域は河幅が広くなかったために首都として永く存在することも困難であった。

#### 遷都（タウンゲーよりペゲーへ）

1539年、タビン・シュエティ王はペゲーの町を拡張して、そこに都を定めた。かくして、モン・タライン族の都ペゲーにビルマ族がはじめて王宮を築いた。タウンゲーはバイン・ナウンの父 <sup>ミン イエー・ティン カトウ</sup> Min : yè Thingkathū に王の代理として治めさせた。彼は <sup>ミヤ ジー ゴン</sup> Myazi : gon パゴダを建立し、また、寺院や池を多数造営した。（ウ・ミンハン、p. 248）

それよりまた、1541年、王はバイン・ナウンと共にマルタバンを攻撃したが、マルタバンはタガー・ユッピの義兄弟 <sup>ソー・ビンニャー</sup> Saw-Binnyā : （タガー・ユッピの妹婿）によって守られ、海と山に囲まれた堅固な要塞である上に、ポルトガルの傭兵たちがモン・タライン軍を援助していたため戦闘は困難を極めた。6ヶ月間戦った後、遂にマルタバンを占領し、同時にモールメイン、タヴオイ等のモン・タラインの族長たちもタビン・シュエティ王に恭順の意を表わすようになった。

彼は多くの点において政策的にモン族と妥協的な方法を用いたことがうかがわれる。しかし、また、時にはモン族に対して、殊にポルトガル人の助力を借りて戦った時には野蛮な残忍行為がなされたということが Hall (p. 39) によって述べられている。その野蛮な行為の贖いとして、タビン・シュエティ王はモン族が建立したパゴダに新しい尖塔を設けたり、シュエダゴン・パゴダに高価な捧げ物を奉納したということである。

その後、水陸両路より、1542年プロームに軍を進め、そこを占領した後、ペゲーへ帰った。そして、政策的にモン族の慣習に依る即位式を行い、下ビルマ国王として宣言した。1546年には上ビルマのパガン、サリン、サグー、レーガイン、チャウパダウン、タウンドウイン、マゴエ、サレー等イラワヂ河左右両岸に沿った地域を占領し、ビルマ・モン両民族の習慣に従って戴冠式を行い、名実共に全ビルマ国王として君臨した。彼の偉業はまだその半ばを完成したに過ぎなかったが、大勢はすでに決っていた。国民は再び以前の盛儀を仰ぐことができ、ビルマがシヤン系に属する人々の手に委ねられてからすでに約 250 年、ここに再び全ビルマに君臨する王の出現を見たのである。

#### アラカン 征服

1546年にアラカン王 <sup>ミン</sup> Min : <sup>ビン</sup> bin が亡くなり、彼の王位継承者とその叔父であるタンドウエーの太守とは折合いが悪く、タンドウエーの太守が軍を進めたので、タビン・シュエティ王とバイン・ナウンはアラカンに侵入した。アラカンとの戦闘では最初タライン軍に攻めさせたが、多くの軍船はアラカン軍によって撃沈された。そこで、タビン・シュエティ王自身が軍を引きいて、アラカン軍を破ったが、強固に防られていた首都は容易に落ちなかった。そうこうするうちにタイ国によるタヴオイ侵入の報に接し、タビン・シュエティ王は一時アラカンと停戦を約し、その

条件として、アラカンの北部を王子に、そして、南部をタンドウエーの太守にゆづることにして、タビン・シュエティ王の軍はペグーへ引きあげた。

タビン・シュエティ王のアラカン遠征の理由については各史家（英人、ビルマ人を含めて）によっても意見がまちまちである。私としては、次の二つの理由をあげたい。

一つの理由として、タビン・シュエティ王は野望にかられ、勢力拡張のためアラカン国がプローム事件に関与したことに対する報復のためであり、第二の理由は、ウ・ティンウによって記されている如く、当時、タビン・シュエティ王はインワを完全に征服しておらず、それを遂行するためには兵力が足りなかったのでアラカンの兵力の補充を必要としていた。そこで、好機を得てアラカン侵入を企て、アラカン国より捕虜を得ようとするのが目的であった。そして、その目的遂行のためにはポルトガルの傭兵の力をも借りたとのことである。

### タイ遠征

タビン・シュエティ王がアラカンに軍を進めていた隙に乘じ、タイ国の軍はタヴオイを侵略したので、アラカンより帰国したタビン・シュエティ王は容易にタイ国の侵入者をタヴオイより追ひ払い、1548年ビルマ軍、モン・タライン軍、ポルトガル人の傭兵を含む大軍を以てタイ国に攻め入った。その時の経路は、ウ・ティンウ (p. 126) の記述によれば、サルウween河を筏にて横ぎりアッタラン河を逆のぼって、谷間の道路に3つのパゴダを建立し、そこからメカラウン河沿いにカンプリーを通して軍を進め、タイ国の首都アユタヤーを包囲した。タイ国王の弟、王子、その他の王族を逮捕し、タイ国を屈服させた。タイ国王 <sup>ビヤターディヤーザー</sup> Byathādiyāzā は毎年30頭の戦象、300ルピーの銀、タニンダーリーの船舶税を納めること等を約したので、タビン・シュエティ王はそれを受入れて、王族一同を返した。この事件によって、タヴオイはビルマが領有し、タニンダーリーはタイ国に属することが明白となった。その頃よりタニンダーリーとマルタバンはポルトガル人が出入する貿易港となった。

1539年ペグー王朝がビルマ族の指揮者タビン・シュエティによって滅亡するまで歴代の王が仁政を施したためペグーは平和を保ち栄えた。新しい時代は北部におけるビルマ族の拡張運動と共にその夜明けを告げつつあった。ポルトガル人たちはタビン・シュエティ王の軍隊に仕えるためタウングーに集まり、ビルマ人は彼らより新兵器の使用を学び始めた。

ビルマ史は中国史と比較すれば王朝と王朝との区切りが判然としないと云われているが、それは異民族対立のためビルマ全土を包括する大国ができる可能性が乏しいためであろう。16世紀の中期はインワ王朝、ペグー王朝、そしてビルマ族が建国したタウングー王朝の三つの国家の三鼎立の時代である。

ビルマ族はシャン族の圧迫に抵抗しながら伝統的精神を放棄することなく下ビルマの再建に着手した。この再建運動の中心となった場所はマングレーとラングーンの間にあるタウングーであった。彼らはこの地でビルマ族によるビルマ国家の建設計画を進め、1531年タビン・シュエティ

はタウングーの町で新政権を樹立した。これがタウングー王朝である。彼はビルマ三大英傑（学報12号 112 頁）の一人であり、19年の統治間にデルタ地帯、ペグー、プローム、上ビルマ、アラカンの諸地方等を征服し、タライン王国とシヤン地方を除くビルマ全土の統一を完成した。もともとタウングーは13世紀の末にはインワ王朝の一州に過ぎず、常にペグーと手を握って、インワ王朝に対抗していた。タビン・シュエティ王の次に即位したバイン・ナウン王もタビン・シュエティ王に劣らない勇猛な王で1555年、インワを滅ぼし、シヤン王朝に止めをさし、それ以後シヤン族の動きは目立たなくなった。

1548年にタウングーにて王代理をつとめていた <sup>ミン イェー ティン カ トウ</sup>Min:yè Theing-hkathū が亡くなったのでバイン・ナウンの弟に <sup>ティハトウ</sup>Thihathū の号をあたえて後を継がせた。

#### タビン・シュエティ王の最後

タイ国より帰国した後、王は一人の若いポルトガルの将校と交わり、飲酒に耽った。酒乱がもとで多くの罪なき人々を殺害するようになった。その一例として、ウ・ミンハン (p. 254) によれば、王の乱行を中傷する人々を十分な調査もせず処刑した。誠実なバイン・ナウンは若いタビン・シュエティ王をあらゆる点において善導しようとした。しかし、王は彼の忠告には耳をかそうとせず、ただ思うがままに振舞うとするのであった。バイン・ナウンも王の態度に屈せず、国状を理解するように幾度となく王に繰返し諫めた。また、バイン・ナウンは王が夜寝つくまで彼を見守り、朝は王が目覚める前に出廷し、政務にたづさわった。そして、王が死罪を申し渡した者でも無実であれば秘かに自由にしてやった。しかし、彼の努力は空しく、王の素行は悪の方に傾いて行った。遂に、ビルマ、モン、シヤン諸族の大臣高官たちはタビン・シュエティ王を廃位すべしと主張したので、王の義兄であり、信頼された忠告者であったバイン・ナウンが摂政として政権をとった。バイン・ナウンが1549年シリラムを根拠としてダゴンとダラを占領していたタライン族の反乱者 <sup>タメイン トー ラー マ</sup>\*Thamein Htawrāma (\*Smim Htaw と呼ばれる) を追跡中、タビン・シュエティ王はパンタノーに滞在していた間に、かねてより王位をうかがっていたタライン族でシッタウンの太守であった <sup>タメイン ソー ドツ</sup>\*Thamein-Sawdut によってそそのかされてジャングル内に連れこまれ、殺害された。ビルマ暦912年、即ち、A D 1550年、Kason の月（大たい、日本の5月に当る）で、時に34才であった。ウ・ボチャ (p. 172) では、彼が飲酒に酔いつぶれ睡眠中に、タメイン・ソー ドツの部下によって暗殺された、と記されているが、ビルマ人の考え方によれば、かかる暗殺によってモン・タライン族がハンタワディを支配することはできず、依然ビルマ族がその支配を継続するであろうという兆候であると解釈される。

タビン・シュエティ王殺害の原因を要約すれば、(1)王が飲酒に耽ったこと。(2)王として守るべ

\* Smim も Thamein も共にタライン語で、ビルマ語の "min:" または "Shinbuyin" 「王、支記者」を意味す。Thamein-Sawdut の Thamein も同じで、二人共 Wareru 家の子孫であったといわれている。

き戒律を疎そかにしたこと。(3)信すべきでない者(ポルトガルの若い将校や Thamein-Sawdut) を信じたこと。(4)王に対して誠実な人々 (バイン・ナウンやマルタパンの太守 Sawla-kwon : ein<sup>ソーラコンエイン</sup>) を避けようとしたこと。(5)素性の解らないタライン族の \*美姫を王妃に任じ、そのため王が墮落した。等が挙げられる。

今や到る所に反乱の兆候が見えはじめた。そこでバイン・ナウンはスミム・トーの追跡を中止して、タウングーの東の小山に一時身を隠した。バイン・ナウンの弟に当る Thihathū はタウングーを占領し、自ら “Min : Gaung” の号を名乗ってそこを支配した。タメイン・ソードッはペグーの王位を奪取した。しかし、彼もまたスミム・トーに亡ぼされ、スミム・トー自身がペグーの王座に即いた。

タビン・シュエティ王がモン・タライン族の習慣を重んじたことは前述した通りであるが、その例として、ウ・ボチャによれば (p. 169), 王はタライン族の服装をして、頭髪の結い方や thamein-tangot と呼ばれるタライン風のターバン王冠をかむった。また、王は前述のタライン族の美妃を愛したが故に、彼女のすすめに応じてタライン風の習慣に従った、ということもいわれている。いづれにせよ全ビルマ統一のためにはモン・タライン族とは常に妥協的態度をとることが必須不可欠であった。

しかし、彼は全ビルマの統一にはいまだ成功していなかった。それは彼が征服した領土を組織化された堅固な王国として建設せずに新しい国々を次から次へ征服し続けることに専念したからではなかろうか。征服された地方ではいつでも反乱を起す機会を窺っていた。従って、王が殺害されるや直ちに各地方は独立せんとする気配を示した。

もしバイン・ナウンが野心家であったとするならば、タビン・シュエティ王に代って王位を乗取することは容易なことであっただろう。ビルマ史上ではこのような場合、王位を篡奪する者が多いが、ビルマ人のうちに誠実さを見出そうとするならば、かかる人物を求めるべきであって、他のビルマの偉人に例を求めるならば、チャンジッターやミンダー・ヤンナウンを想起すべし。

バイン・ナウン  
Bayinnaung (1550~81)

タビン・シュエティ王の後、バイン・ナウンが王位を継いだ。彼は先王に次いで全ビルマ統一の事業を続け、ビルマ本土と共に、ジンメ、東北部シヤン州、マニプール等周囲の国々を統べた。また、ベンガルやアラカンも朝貢を約し、同盟を誓った。

---

\* タライン族の間で育った美姫について、Hm. Yaz. (Vol. 2, P. 239~240) には次の如く記されている。

一人のタライン族の富豪が5千頭の牛を所有していたが、その中の1頭の牝牛が懐妊して、一人の人間の女子を生んだ。その富豪には子がなかったので彼女を養女として育てた。年頃に達すると彼女は Hkemanaw<sup>クマノ</sup> という名で呼ばれ、仙女のように美しくなった、折しも庭園にてタビン・シュエティ王の目にとまった。…

## バイン・ナウンの生い立ち

タウンゲー県内に含まれているティーラインの出身で、棕呂の樹によじ登って棕呂の実の汁液をとることを職業としていたマウン・テインガとその妻マ・ミンフラとの息子で幼少の名はマウン・チャテッ (Maung Hkya Tet) と呼ばれていた。将来の兆候を占った結果、彼は母と共に南の方、タウンゲーへ赴き、母のマ・ミンフラはタビン・シュエティの乳母となった。そこでマウン・チャテッもタビン・シュエティとは幼な馴みとして育てられ、成長してからバイン・ナウンと名付けられた。やがて彼はタビン・シュエティの姉に当るダキンデーと結婚した。このように王族には属していないけれども、その能力、勇気、気品等によって、タビン・シュエティ王の後を継いで一国の王にまで達したことはビルマ史においては稀でりっぱな人物であり、後世の人々によって「ビルマのナポレオン」といわれるほどの英雄である。

1550年バイン・ナウンは一時避難していた山から降り、少数の忠実な部下とポルトガルの将校\*Diago 等と共にタウンゲーとプロームを取戻すことができた。翌年1551年に彼はペグーを襲い、スミム・トーを破って、彼をデルタ地帯に遁走させた。ペグーは降服し、スミム・トーは捕えられて、処刑され、ここに Wareru<sup>ワーレルー</sup> 家の血統は絶えた。バイン・ナウンは2年を費やしてペグーに宮殿を再建し、外国より訪れる人々の賞讃を得た。

## インワの征服

1553年、バイン・ナウンの子 Nanda Bayin<sup>ナンド バイン</sup> はイラワヂ河流域をさか上ってパガンを50マイル過ぎた所のタヨッミョーまで軍を進めた。翌年、軍船の一隊がイラワヂ河を上り、一方、バイン・ナウンは主力軍と4百名のポルトガルの砲兵をひきいて陸路よりヤメデインへ進んだ。水陸両軍はサガインに近いピンヤを攻撃した。ピンヤはシヤン系の支配する都であったが、インワへ退却を余儀なくされ、1555年に占領された。そこでバイン・ナウンは彼の弟 Thadominsaw<sup>タドー ミンソー</sup> をインワの太守として、そこに残し、彼自身は下ビルマへ帰って行った。

## シヤン諸州の征服

ウ・テインウ (p. 134) によれば、バイン・ナウン王は1556年にビルマ北部及びシヤン州北部を、また翌年1557年にはモー<sup>マ</sup>ネ、ニャウンシュエ、ヤウサウモービエ、サガー等の地域を占領した。1558年にはサルウィーン河の西岸、そしてシヤン土侯たちの争いに乗じて南北全シヤン諸州及びタイ国北部地方をも征服した。翌年マニプール (ビ, Kathè) がビルマを侵したことに對して軍を進めたが、マニプールは戦わずしてビルマ軍に降った。従って1559年には上ビルマの全域、シヤン諸州、マニプール、ジンメ (チエンマイとも呼ばれる) リンズイン等が併合された。

\* Hall は Diogo Soares de Mello と記している。



シヤン諸州に対するビルマの主権はこの年より始まる。

更にウ・テインウ (p. 138) によれば、バイン・ナウン王は到る所から住民を移してタウンギーに扶植したが、ジンメからは有名なジンメ漆器の職人たちを連れてきて、<sup>ユン</sup>Ywun：と呼ばれる上質の漆器をビルマにもたらしたのは恐らくこれらの職人たちであっただろう。Ywun：という名は本来ジンメ周辺の<sup>ラオ</sup>Lao<sup>シヤン</sup>Shan 諸部族を指すものである。また、王はマニプールを征服した時、Kathè 族よりガラスや銅の製法、及び織物の技術をビルマ人に修得させた。

1562年には雲南地方に侵入し、その地域一帯とサルウィーン河東岸のチャイドン附近の地域を占領した。このようにして短期間のうちにビルマ全土の北端より南端に至る間の反乱を鎮圧したバイン・ナウン王はタビン・シュエティ王の第二ビルマ王国の建設を継続することができた。もしバイン・ナウンに能力がなかったなら、それ程の広大な領土を建設することができなかったであろう。ところが、彼もここでそれ以上の遠征を止めるべきであった。

#### タイ国攻略 (1564年)

強力な軍隊をもち、連続の戦いの勝利のため、益々国土を拡張せんと欲して、バイン・ナウン王は1563年、タイ緬国境におけるビルマ側とタイ国側との衝突、及び、タイ国王 Chakrap'at が所有していた4頭の白象のうち1頭をバイン・ナウン王が要請したのを拒絶したことが原因となってタイ国と争った。

バインナウン王はタイ国を二度に渡って攻撃した。最初の戦役では<sup>カム</sup>Kampeng<sup>ベン</sup>pet と<sup>スコ</sup>Suk<sup>タイ</sup>hotei を攻略し、更にアユタヤーを猛攻し、可成りの犠牲者を出したが、大勝利を博した。アユタヤーはビルマ軍に属するポルトガル砲兵隊を恐れて1564年降服した。バイン・ナウン王はタイ国王子<sup>ビヤマヘイン</sup>Byamahein をタイ国宮廷の護衛の任に当て、タイ国をビルマの属国とした。そして、タイ王族をはじめ大臣高官たちをも捕虜とし、その他、4頭の白象、種々な技術や医学に通じた者、音楽や踊りのできる者、等をビルマへ連れ去った（パガン時代にアノーヤター王がタトン攻略の際を想起されたし。）なお莫大な宝物、殊に種々な銅製品その中には国王、女王、象の像をも共にビルマへ持ち去ったが、バイン・ナウン亡き後、アラカン軍によってそれらは持ち去られるが、後1784年にビルマ王<sup>ボー</sup>Bō<sup>ドー</sup>:<sup>バヤー</sup>daw hpayā: はそれらを取戻し、マンダレーの<sup>マハー</sup>Mahā<sup>ミヤツ</sup>Myat<sup>ムニ</sup>Muni パゴダにその幾つかはいまだ安置されているそうである。

金、銀、宝石、銅製品等を多数の車に満載し、きらきら輝く装飾をほどこした2千頭の戦象を従え、りっぱな覆い付きの車にはバイン・ナウン王が乗り、彼の足下にはタイ国より連れ去ってきた高価な宝石を身につけた王妃たちが王に任えた。その車を捕虜になった王族、公達、貴臣たちが引っぱっていた。その後ろからは数万の騎馬兵、歩兵が列を作って勝利の太鼓や銅鑼を打ち鳴らし、ハンタワディの都城へ入って行った。このようにビルマ軍は勝利の誇りの脈膊が高まりつつあるのを感じていた。これが第一次タイ国遠征の有様であった。しかし、この記事はビルマ史家が述べたものであって、英人史家のものとは多少相違する点が見出される。いづれにせよこ

れらタイ文化の獲得はその後ビルマにとって大きな利益をもたらした。

### ペグーの再建

バイン・ナウンがペグーに到着すると、そこにはすでに反乱が起きていて、彼の宮廷を含んだ多くの建築物が彼の不在中に灰燼に帰してしまっていることを彼は知った。反乱は容易に鎮圧され、多数の反逆者たちは逮捕された。バイン・ナウンは彼の宮廷及び他の建物を回復するのに3年を費やしたが、今度ははるかにより大規模にペグーの町を再建し、20の城門を設けた。そして、ペグーは再び商業の一大中心地となり、遠国より商人が集まる町となった。それは外国人にとって堂々たる偉観を呈する都であった。

1569年にペグーを訪れたイタリーの探險家 Caesar Frederick はバイン・ナウン王の偉大さを讃え、「彼の権威と富はトルコ大王のそれにはるかに優る」と述べ (Hall, p.43~44), 更にペグーの町について、「新しい都には王宮と大臣高官たちの住居もある。それは広々とした平たんな町で、周囲が壁でめぐらされた4つの広場があって、壁の四面は水で囲んだ堀を設けてあり、その堀の中にはたくさんのわにがいる。それには可動橋はないが、各広場に5つずつ、合計20の城門が設けられてある。門の中にはりっぱな大庭があって、そこには最も力強い象のための場所が造られてある。王は白象を4頭所有しているが、非常に稀なもので、これ程の白象を所有し得る王は他にほとんどいないであろう。…」 (p. 45~46)

### 第二次タイ攻略 (1569年)

捕虜になったタイ国王はその後5年を経て僧侶となって彼の家族と共にタイ国へ帰還を許された。タイ国の首都に着くや、彼は還俗して、アユタヤーの太守である彼の息子 Byamahein と共にバイン・ナウンに対して反抗した。バイン・ナウンは直ちにタイ国に攻め入り、1569年アユタヤーを包囲した。その包囲は10ヶ月間続き、ビルマ軍の損害も大きかったが、首都は遂にタイの將軍の裏切りによってビルマ軍に占領された。タイ国王 Byathādiyāzā は熱病のため死し（一説には毒を仰いで自殺したとある）、彼の息子は処刑された。ビヤターディヤーザーの養子に当るピターラウの太守タウンチ土侯をタイ国の王座に即かせて、ビルマ軍はひきあげた。

このタイ・緬戦役も、一頭の白象の要請を拒絶しなければ起らずにすんだであろうつまらない原因に帰するものであると英人史家は見ているようである。しかし、バイン・ナウンにとってはそれが拒絶されたことは耐え難い侮辱であると感じたにちがいがなかったであろう。何故ならば白象は仏教徒の支配者にとっては何物にも換え難い貴重な象徴物であったからである。（白象に関しては学報20号、160~62頁）。また、タイ国側にとっては白象をビルマにゆづり渡すことはビルマの属国になることを意味していたであろう。

その後、バイン・ナウン王は、またリンジンの長を追って、アユタヤーにて彼を攻撃した。しかし、その追撃はただ彼の兵力の大多数を失う結果に終わった。1570年、彼はリンジンの長を捕え

ずにビルマに帰った。モーニンとモンナイの土侯たちも反乱を企てたが、辛うじて鎮圧された。

#### セイロンとの関係

1560年に、ゴアの総督 Dom Constantino de Bregança はセイロンにて St. Francis Xavier によって改宗させられたカトリック教徒たちがセイロンの北岸にある Jafna の支配者によって迫害を受けていることを聞き、ポルトガルの遠征軍を送って、ジャフナの町を占領略奪した。戦利品のうちには宝石をちりばめた箱の中に一つの歯が入っていたが、伝えるところによれば、その歯は仏教徒にとっては最も貴重な遺物である Kandy の仏歯で、Kandy の王が一時 Jafna に預けてあったものである、ということである。

その仏歯がポルトガル人によって奪取されゴアに持ち去られたという驚くべき報せがやがてバイン・ナウン王の耳に入った。王は即位以来数度その仏歯に供物を献上し、カンディの寺院の社に灯火を備え、その寺院を美しくするために職人を送った。また、王は寺院を掃くためのほうきを彼自身と彼の正妃の頭髮にて作り、それを送ったという。従って、彼がその仏歯を買い戻すためには王者にふさわしいだけの金額を払って総督に使者を派した。彼はタイ国より獲得した白象とカンディの仏歯を所有してこそ彼が世界中で最もすぐれた君主であろうと信じた。

総督はバイン・ナウン王よりの申し出を快く受け入れたが、それをペグーへ届けることになったポルトガルの将校たちはビルマへの途上の所々にてその仏歯を人々に見せることによって大金を儲けようと計画した。ところが、ゴアのカトリック教の大司教はそのような問題は宗教裁判にかけられるべきであると主張したので、総督も敢てそれを拒めなかった。激しい議論の結果、宗教裁判所はかかる危険極まる偶像（に等しきもの）は破壊されねばならぬという結論を出した。その宣告は大群衆の見守る中で厳かに発せられたが、それら恐れおののく観衆の中にはビルマの使者も含まれていた。大司教はその仏歯を大きなひき臼の中で重いきねによって破砕した。そして、それは焼かれ、その灰は海にまかれた（1561年）。しかし、Hall はなお記述を続けて、ポルトガル軍が Jafna に侵入した際に真の仏歯はその支配者によって前以て隠され、総督には猿の歯でごまかした、ということである。（Hall, p. 44～45）

1576年にセイロン島においては仏教徒である <sup>ダンマ</sup>Dhamma <sup>パーラ</sup>Pāla 王と他宗教を奉ずる3人の支配者が分裂してその国を支配していたが、ダンマパーラ王はそれら3人の王を圧して仏教を盛んにせんとしてビルマのバイン・ナウン王のもとに使者をつかわした。そこでバイン・ナウン王は彼を援助するためにビルマ軍を送った。セイロンに達したビルマ軍の兵士たちは勇気と武術を十分に発揮して3人の王を屈服させ、ダンマパーラ王を援けた。従って、バイン・ナウン王の時代にはビルマとセイロン間の交友関係は非常にようになった。

バイン・ナウン王はセイロンの王女を迎えるためコロンボへ使者を遣わした。セイロン王はそ

の婚礼の贈物として \*王女と共に仏歯を送った。その時、セイロン王はそれがカンディの真の仏歯であることを誓った。(Hall, p. 45)。

その仏歯はバセインへ、それからペグーへ堂々たる儀式によって届けられ、バイン・ナウン王の建立になるペグーのマハーゼディに奉納された。パガン時代において、アノーヤター王が入手したものはその仏歯の分体に過ぎないし、また、アラウン・シートウ王によって求められたことがあったが、その探さくは空しく終った。今やバイン・ナウン王はセイロンのカンディにある仏歯寺よりこれを獲得したのである。

#### アラカン侵略とバイン・ナウン王の最後

ペグー及びシヤン諸州における反乱はバイン・ナウン王のタイ攻略の結果であった。けれども彼はアラカン征服を決意し、1580年に、大軍船をアラカンに進めたが、ネグリス岬の沖にてアラカン側のポルトガル船に襲われ、数隻の船が捕獲された。そして、他の軍船はタンドウエーに着陸した。バイン・ナウン王はアラカン山脈を横ぎって攻め入ろうとしたが、その計画は彼の死去のために実行されなかった。彼は97人の子女を残して66才にて没す。彼の後をその息子 Nanda Bayin が継ぎ、タンドウエーからビルマ軍を呼び戻した。

#### バイン・ナウン王の文化上の業績

バイン・ナウンは幾多の軍事行動のほかに、ビルマ国のために多くの貴重で有益な文化事業を為した。彼は偉大な征服者ではあったが、政治家や行政官ではなかった。

彼はビルマ国を最も広く建設した点において、王の中の王と称してもよいであろう。そして直接ペグーその他のタライン領を支配した。一方ビルマの各地では24の大王小王が濫歩し、タライン族も高い地位を与えられていた。

タイ攻略の結果として、彼はタイ国より音楽、舞踊等と同時に銅製、鍛冶、漆器等の技術や知識をビルマ国内に導入し、それまでのものをより改良し、広めた。また、度量衡についても全国一定の基準単位を定めるためそれまでのもの（パガン時代にアラウンシートウ王の頃定められたもの（学報16号、70頁）よりも一層改良された。

#### 経 済 上 の 業 績

バイン・ナウン王は経済政策の面においても、彼の能力を示した例がウ・ティンウの「ビルマ史」のうちに述べられている (p. 136)。

王はヨーロッパやアジアの国々と貿易を促進させるために海に面した町々を開港して外国船に寄港する機会をあたえ、関税を公平に徴集した。そしてペグーにて外国貿易を取締るために8名

---

\* セイロン王には娘がなく、恐らく養女であつたらしい。また、既述したその他の点についても史家によって少し異った記述が見られる。

の仲介者を任命し、その仲介料として 2/100 チャットの割で徴集した。また、物々交換を容易ならしめるためにも度量衡の画一を指示した。

### 文 学 上 の 業 績

バイン・ナウン王は文学をも奨励し、彼の時代には僧侶のうちからも、また俗人のうちからも多くの学者や詩人が現われた。有名な Yadu 詩人 <sup>ナワデー</sup> Nāwadē : がこの時代の人であった。

また、“Yāzādarit Ayēdawbon” (ヤーザダリ王軍記) が王の大臣として仕えたモン族であった <sup>ビンニヤー</sup> Binnyā : <sup>ダラ</sup> Dala によってモン語からビルマ語に訳されたが、彼のビルマ語訳は流麗ですぐれた文体である。

### 法 律 上 の 業 績

バイン・ナウン王は法律上の規定を設けるために僧侶や役人の協議会を開いて、Wareru Dhammathat (学報22号, 19頁) を基礎として、<sup>ダンマ</sup> <sup>タツ</sup> <sup>チヨー</sup> Dhammathatkyaw と <sup>コー</sup> <sup>サウン</sup> <sup>チヨツ</sup> Kō : hsaung hkyok を編み出した。<sup>ハンタ</sup> <sup>ワデイ</sup> Hanthawaddy <sup>シンビユーミヤシン</sup> Hsinbyūmyashin <sup>ピヤツトン</sup> Hpyatton : は彼の法廷における裁判例の集録したものであり、現在に至るまで大いに利用された。

しかし、次の事業より観察すれば、王の業績をマイナスにする要因もかなり多く見出される。バイン・ナウン王は幾多の辛酸を兵と共にしたが、国民からは信頼を得なかった。というのは打続く戦乱も彼にとってはビルマ国統一という理想のためであっただろうが、庶民にとっては死を意味するものであり、ペグーはしばしば飢餓に陥った。いかに肥沃なデルタ地帯といえども田を耕やす農民なくしては米は実らない。デルタの農民はすべて拉し去られて、異境の労役に服し、また、戦死者も多く飢えと赤痢による損害は更に大きかった。また、前述の通り、王が征服した地域の人口を回復するために強制移民としても狩り集められた。人民は遂に王を憎むようになり、不満を訴えた。

彼は強固な政治組織を造り得なかった。彼の治世を通じて、彼はその勢力を維持するためには東奔西走しなければならなかった。統治力をもち得ざる王として、彼は一切処にいるということではできなかった。彼が一度背を向けるや、いつ叛乱が起きるかも知れなかった。彼の歿後、幾許も経ずして崩壊したことを思えば、彼が為した統一は所詮人為的統一に過ぎなかった。

### バイン・ナウン王の宗教的事業

バイン・ナウン王は敬虔な仏教徒であったので、彼は仏典を広く配布し、僧侶を優遇し、彼が征服した国の所々に多数のパゴダを建立し、また修復して、人々のために多くの寺院を増築した。彼は王者の慣習に従って、シュエダゴン、シュエモードー、チャイティヨー等その他幾つかの重要なパゴダの九輪に宝石をちりばめた。また、王が52才の年令に達した時、年令と同じ数の、即ち、52基の寺院を建て、52人の僧侶を得度せしめた (ウ・ティンウ, (p. 137), と述べられて

いる。セイロンより送られてきた仏齒がポルトガル人によってボンベイへ持ち去られた時、それ  
を取戻すために多額の財宝を費した。また、王は外国人をも仏教に改宗させようとしてあらゆる  
努力を為した。彼は恐らく仏教徒として飲酒を嫌い、飲酒者には死罪を加えてそれを禁止した。  
なお迷信の盛んな地方で、いまだ仏教が布教されていない所々には仏教僧や仏典を送り仏教布教  
のために尽した。

### 悪習の廃止

古代人は首長が死んだ場合、<sup>よみじ</sup>黄泉まで彼の供をさせるためにその妻妾や奴隷や愛玩動物等を道  
連れのために殺生する必要があると考えた。そして、このような風習はかつて世界到所に行な  
われたものであるが、バイン・ナウン王の時代にもいまだ迷信によるこのような悪習慣が上ビル  
マにおいて行なわれ（ウ・ティンウ、p.137）、国民を害していた。それを改めるため、先ず王は  
シャン族が行なう葬儀の際のいけにえや人間及び動物を殺生する風習を廃止した。当時シャン州  
においては土侯が他界した時には、彼が乗っていた象や馬、また、彼が慈くしんでいた奴隷等を  
殺生し、土侯の死体と共に葬っていた（ウ・ボチャ、p.179）。彼はまた「殺生」に対する仏の禁  
戒を強調し、ポッパ山のマハーギリ・ナッ祭（学報12号、103～4頁）における白い動物（水牛、  
牛、山羊、豚、鶏等）のいけにえ、及び回教徒による牛のいけにえ祭、即ち、\*Bakrid までも禁  
止した。

尚その他の点に関して他の諸王とは異なって敵に対して慈悲深く、降服した敵を殺害すること  
は減多になかった。しかし、打続く遠征のためには大量処刑や募兵の悪弊からは免れ得なかつ  
た。この事はその後において彼の後継者にも影響を及ぼした。

### Nanda Bayin (1581～99)

バイン・ナウン王の後を継いだナンダ・バインは<sup>ンガー</sup>Ngā : <sup>スー</sup>hsū - <sup>ダーヤカー</sup>Dāyakā の号を名乗って父王の  
政策を続行した。国内に叛乱が起ったため彼はアラカン遠征中のビルマ軍を呼び戻し、北はモー  
ガウン南はモービまでの間を転戦した。彼はまた父王の例にならって血の粛清を決行した。その  
一例は、1583年ナンダ・バインの叔父が支配していたインワが彼に対して反乱を起さんとする計  
画を進めていることが未然に発覚し、その計画に加担しようとした疑いのある将兵はその家族と  
共に多数虐殺された(1583年)。

彼はまた徴兵制を強行したが、このような手段は一時的には成功するかも知れない。事実、バ  
イン・ナウン王の治世においては成功した。しかし彼の場合には失敗であった。失敗の原因はそ  
の行き過ぎにあった。徴兵はビルマ国民にとって堪え難い苦痛であり、それを免れるためには人

\* ハーヴィの〔註〕（P.139）に、回教暦12月10日より4日間行なわれる犠牲祭（クルバン）。「バクル」は  
ペルシア語にて「牛」を意味する。回教徒が犠牲として献げる動物は本来羊であるが、インド、ビルマの回  
教徒が牛を以てこれに代えるところから「バクリッド」（牛祭）の称呼を用いたものである。

々は競って仏門に入り宗教的平安を求めるのであった。また、ウ・ボチャの述べる所では (p. 180)、一旦仏門に入った者を還俗させて徴兵し、ある者はニャウンヤンへ、また、ある者はインワへ、またサガインへ、またシャン諸州へ移されて行った、とある。

もしバイン・ナウンに政治的先見の明があったとするならば、彼のタイ国遠征の経験を生かしたであろう。英人史家たちも指摘する如く、タイ国を保持し得る最良の道はタイ国を明け渡して、あらゆる失費を節減することであったのではなからうか。しかし、バイン・ナウンもその子ナンダ・バインもこの理を覚ることができず、僻遠の地域を制御するために彼らのとった方法は戦闘を繰り返すことであった。そして、ただ民を消耗させ、彼らのうち生き残った者の数だけでは土地を耕やすに十分ではなく、従って遠隔の諸地方へは食糧を送る余裕はなく、あまつさえウ・ティンウの記録によれば (p. 143)、1596年には野鼠による大害を蒙り、恐るべき饑饉が到来した。

ナンダ・バインの王国を壊滅させたものはアユタヤーである。当時アユタヤーはかの有名な Narasuen 親王の指揮下にあった。ナンダ・バインは 1586 年より 1596 年までの 10 年間毎年兵をひきいてタイ国に入ったが、その都度彼は残り少ない兵力を消耗するのみで一度もアユタヤー攻略に成功することができなかった。彼は 2 万 5 千の兵をすら調達することができなかった。それは父王バイン・ナウンがひきいた兵力の 3 分の 1 に過ぎず、このような寡兵をもってしては到底アユタヤーを包囲するに足らず、そのため包囲されたアユタヤー軍が餓死する前に包囲していたビルマ軍の方が餓死する有様であった。1593 年ナンダ・バインの一子が Naresuen との一騎打に倒れるや、ビルマ軍は潰走し、四分五裂の状態に陥った。それ以後、ナンダ・バインはタイ国に侵入できないどころか、却ってペグーはアユタヤーに侵略された。

タイ国史の面から見たビルマのタイ攻略を吉川利治氏の「タイ国概説」のタイ国史、p. 48~49 より引用させていただく。もちろんタイ国側より見たのであるから、ビルマ側の事情にはふれていないが、興味ある記述がうかがわれる。

「白象を集めることが好きだったチャカパット王が 1549 年即位するやアユタヤーはビルマ軍に包囲され、タイ国三女傑の一に数えられる王妃スリヨータイが天晴れな戦死をとげた。辛くもビルマ軍を撃退したが、ペグーに都していたビルマのブレンノーン (バイン・ナウン) 大王は 1556 年シャンを降し、1563 年にはチェンマイを攻略し、さらにアユタヤーに向った。国王 (バイン・ナウン) は対タイ宣戦の口実として白象を要求した (白象を相手に渡せば属国になる)。この間タイはカンボジアにも軍を出していたが、失敗していた。翌 1564 年アユタヤーは陥落しチャカパット王を始め主だった王族は人質としてペグーへ連れ去られた。王は同地で僧籍に入り 2 年後、アユタヤーへ巡礼に行くと称して出国、アユタヤーに帰るや残っていた王子と共にピッサヌロークのビルマ軍を攻撃した。ビルマ王は 1568 年再びタイを攻め、1569 年 8 月チャカパット王は遂に戦死、王子はビルマへ連行される途中で死去。以後 15 年間タイはビルマの支配下にあった。しかし、ビルマに連行されていたナレースワン親王は 1571 年帰国を許されピッサヌロークの総督に任じられた。時、御年 16 才であった。カンボジアがしばしばタイに攻め入ったが 1582 年にはタイ

側もカンボジアの首都を攻略した。1584年ナレスワン親王はムアン・クレーンにて独立を宣言、カンボジアと和を結んだ後、1586年ビルマ王のひきいる大軍は6ヶ月もアユタヤーを包囲したが、これを撃破し、さらにカンボジアの首都ラウエークを攻略するに至ってタイの独立は全く回復した。1590年親王は即位し、ビルマ軍をスパンブリーに迎撃、ナレスワン大王はビルマの副王を騎象戦で殺し、以後ビルマの勢力は衰え、逆にタイ軍がビルマに攻め込むようになった。大王は1594年カンボジアの首都ラウエークを攻め、数千の捕虜を中部タイへ移住せしめ、翌年にはビルマの首都ペグーも陥落寸前であったが、退却し南部ビルマのタヴオイ、テナセリウムをタイの支配下におくにとどまった。」

一方、インワにおいては同年1593年にインワ朝最後の王位継承者として <sup>ミン イェー チョー ソー</sup>Min : yèkyaw zwā が任じられた。この王子はビルマ国を動乱に落し入れたが、その原因をウ・ボチャは次のように述べている (p. 180~81)。

彼は上ビルマの人々を強制的にハンタワディーへ連れ去った。そして、ハンタワディー一体の住民（彼らはほとんどモン・タライン族である）に耕作に従事させず、彼らを徴兵し、彼らより徴発した穀物は全部米倉に納めさせて、人々が飢えた時にその値段をつり上げて売った。町中では犬まで殺して、その肉を食った、という。このようにして、滅亡に瀕したビルマ王朝は一そう悪化して行った。

1595年にインワ、プローム、タウングー等が蜂起した。しかもナンダ・バインがこの危急に陥っている際に、彼の一族のうち一人として彼に加勢する者もなく、結束して国を守ろうとせず、専ら各自私事に心を奪われている有様であった。1598年、ナンダ・バインの従兄弟に当るタウングーの支配者 <sup>ミン イェー ティハトウ</sup>Min : yè Thīhathū はアラカン王ヤーザデーと結び、ナンダ・バインを攻撃した。彼の共謀者としてアラカンが選ばれたのは、アラカンは遠国であり、分け前を得て引き上げてしまえば、自分と王位を競う者はいなくなるであろうという考えからであったように思われる。

アラカン軍はバイン・ナウンのアラカン侵入の報復としてミンガマウンの指揮のもとに海路によって進み、シリアムを占領して、タウングーの軍と合してペグーを包囲した(1599年)。民や将兵たちは逃亡して、ナンダ・バインは投降したが、間もなく処断された。

ペグーの陥落を知ったアユタヤーの王はこの時ばかりと獲物を求めて来襲してきたが、タウングーとアラカンは彼と分け前を共にすることを欲しなかったので彼はタウングー以南の地を劫掠してひきあげた。アラカン軍は白象一頭とペグーの王女を連れ去ったが、王女はアラカン王の後宮として差し出された。彼らはまたバイン・ナウン王がタイ国より獲得した幾多の砲と共に30軀以上の黄銅の像を奪い、シリアムを保有していたデ・ブリートの手にこれを委ねた。一方、タウングー王はかのセイロンの仏歯と石鉢を掠め、戦利品を12に余る隊商にて運び去らせた。ペグーの都は焼かれ、バイン・ナウン王が豪奢を誇った王宮も烏有に帰した。疲弊し切った3千人以上のペグーの住民は他の地へ移されて行った。

この惨状をウ・ボチャ (p. 182) は次のように記している。この戦いにおいて傷ついた者、飢



えのため動けなくなった者、息の絶えた者等の上にはげ鷹や鳥が群をなしてたかり、白骨を曝した。船は動けないほど多くの死体を積んで進めなかったという。

その末路は世にも哀れで、下ビルマの惨状は筆舌に絶する。飢えた人々は果ては人肉までも食ったといわれている (Harvey, p.113)。この惨禍の原因の一部はもちろんペグーが蒙った侵寇にある。しかし、その多くはすでに幾十年にもわたる外征と国内における農業の荒廃に帰因するものと考えられる。

ペグーとビルマを統合して一つの王国とし、タイとアラカンをも合併せんとしたナンダ・バインの企ても遂に失敗した。

マルタバン以南の地はアユタヤーに服従し、ビルマは再び群小の国々に分裂し、それらの国々は各王家の諸公によって支配されていたが、そのうち最も秀れたものはバイン・ナウンの子であるインワの王であった。彼は上ビルマ及びシャン諸州を掌握し、ペグーに反抗した。彼の後を継いだのはその子 Mahā Dhammayaza で、通例 Anaukpetlun (アナウペルン) として知られている。

学報25号、26頁にて述べた通り、1554～1597年の間 (王不在の4年間を含んで) ビルマ王家のインワ朝は43年間続いたが、この期間中に3名の王が支配した。即ち、ペグーにおけるバイン・ナウン王の時代にはインワでは <sup>タド</sup>Thadō : <sup>ミン</sup>Min : <sup>ソー</sup>saw, ナンダ・バインの時代には <sup>ミン</sup>Min : <sup>レツヤ</sup>Letyā と <sup>ミン</sup>Min : <sup>イェー</sup>yē : <sup>チョー</sup>chō : <sup>ソー</sup>sō であった。この後、第二次インワ王朝時代に入る。

ところで、当時のインワ・タウングー王朝時代に関連して、ビルマに入り込んできたヨーロッパ人について述べる必要があると思う。

#### ヨーロッパ人の渡緬について

かなり古い時代より東南アジアとヨーロッパの間に貿易が行なわれていたことは明白である。それが行なわれていたのは一部は海によって、また、一部は陸によって行なわれていた。即ち、インドの西海岸より海によって紅海の北部、または、ペルシャ湾岸へ、そして、またそこより陸地に沿って地中海の岸辺へ運ばれ、そこにて品物がヨーロッパ人によって各地へ配られていたのであるが、それが仲介者の手を替える毎に、また、国境を超える度に、その価格は増大した。品物は主として絹、モスリン、絨毯、象牙、金、香料等であった。ところが、アジアにおけるヨーロッパ人の占める領土が1453年トルコ族、または、タタール族の手によって奪われ、欧亜を結ぶ陸路の各地は彼らによって閉鎖されるに及んだので、ヨーロッパ人は海路によってインドへのルートを求めねばならなかった。

#### ポルトガル人の渡緬

Vasco da Gama は希望峰を回航して1498年に南インドに到達し、数年後、交趾及びマドラスの近く St. Thomas に移住した。

A D 1500 年に至り、新航路の開発によって海岸沿いのモン族の都ペグー、バセイン、ミヤウンミヤ等は空前の繁栄に浴した。最初ビルマに関心をもったのはポルトガル人である。1511年、ポルトガル人 Don Affonso de Albuquerque によって \*マラッカが占領され、彼とモン族たちの間に商業上の協定が結ばれた。

その結果、ポルトガルの商人たちはマルタバンやペグーにて貿易をはじめようになった。彼らはヨーロッパから、織布、ビロード等を輸入し、ビルマからは金、銀、ルビー、サファイア、尖晶石、安息香、ろう、象牙、鉛、ペグー壺、テナセリム産胡椒、うるし、米、砂糖等を輸出した。それ故、モン族の港は外国船のいない時がない程に栄えに栄えた。当時ポルトガル人がインドから中国へ行く途中で最も重要な港は世界最大の香料輸出港であるマラッカであった。しかし、ビルマはこの航路よりはかなり遠くに位置していたので初めはあまり関心をもたれなかったが、この航路に近い二つの港、即ち、それはマルタバンとテナセリムであるが、この二つの港があることを知ると、ポルトガル人はビルマに興味を示しはじめた。当時のテナセリムはマラッカに劣らない程の繁栄した町であった。

1519年にアントニア・コレアはペグー王と通商条約を結んだ。その理由は、マルタバンはイラワヂ河とサルウィーン河を下って運ばれてくる品物の中心地であり、テナセリムはタイ国へ陸地によって通ずる最も近い地点であったからである。

当時、ビルマはタウンゲー、インワ、ペグーの3王朝が対立していたが、マルタバンはペグー王朝の統治下にあって、ポルトガルとの通商条約の締結によって、この地にポルトガルの商館が建てられ、更にビンニャ・ラン王はポルトガルとの貿易を奨励し、歴代の王も同様に貿易に力を注ぎ1539年同王朝の滅亡に到るまで繁栄した。このようにポルトガルとの通商が盛んになるにつれて、ポルトガル人は商人として、または、冒険者として来航し、遂に定住するにいたった。また、傭兵として、ポルトガル人がタウンゲー、ペグー、アラカン等の軍隊を援助し、この方面の戦争にその火器をもって加わった。このようなポルトガル人の勢力の集中的現象は1600年にフィリッペ・デ・ブリーートのシリアムを中心とする下ビルマのポルトガル植民地の成立となった。この植民地は1613年アナウ・ペッルン (Anauk pet lun) によるシリアム占領まで続いた。デ・ブリーートはゴアのポルトガル総督より正式にシリアム太守に任命された。

デ・ブリーートとほとんど時を同じくして、ポルトガル人 Sebastião Gonzales Tibao はゴアより積極的な支持を得てチタゴンに近い Dianga を拠点としてアラカンにて同様な役割を果たしていた。

ビルマにおいてキリスト教伝道が行なわれたことについて荻原氏の「ビルマにおけるキリスト教伝道の初期の歴史について」にも述べられているが、Hall もそのことについて言及している。1554年に回教に対抗してカトリック教を拓めるためにポルトガルの宣教師 Gaspar de Cruz と

---

\* マラッカは1455年にタイの属国となった（吉川利治氏著「タイ国概説」47頁）が1511年アルブケルケがマラッカを征服して以来、1641年オランダ軍の手に帰するまで、130年間ポルトガルの領土であった。

Bomferrusの二人が伝道を開始して以来、数名の宣教師の困難な伝道事業が続けられ、当時における宣教師・布教団と政府・商人との利害対立、衝突等、ポルトガル人の宣教師が同国人であるポルトガル商人によってキリスト教伝道が著しく妨害された。彼らは伝道師にむかって、「豚にでも説教した方がましだ。」とまでののしった。(Hall, p. 50)

1600年頃、ポルトガル人がビルマへ到着してきた当時のビルマの状態についての記録は Hakluyt (1552～1616) の記録収集にも含まれていて、恐るべき蹂躪と破壊の場面が描かれている。また、“mendacity”という語がヨーロッパ人の語彙の中で「嘘」という意味の新語となったのも Ferdinand Mendes Pinto の法外な要求より由来しているとのことである (Hall, p. 50～51)。

#### イタリー人の渡緬

ここで Nicolo di Conti その他当時ビルマに来たイタリーの商人たちがビルマ及びモン王国に対してどのような印象を受けたか。それについて D.G.E. Hall (Burma, p. 36～37) の記事を参照しよう。

Dagon (後の Rangoon) は18世紀の中頃に至るまではその港町としての価値は注目されていなかったらしい。当時モン族の重要な港町は Syriam, Bassein, Martaban 及び Pegu 等であった。最も早くよりビルマを訪れたヨーロッパ人は15世紀にこれらの町々へ来たのであった。最初の人にはベニス商人 Nicolo di Conti で、彼は1420年より1444年までの間、インド、タイ及びその他の東南アジア各地を旅し、1435年にはアラカンへ、続いて当時モーニン・タドーが支配していたインワを訪れている。彼はインドのガンジス河以東の地（ビルマを含めて）を Machin (=Maha Chin=Great China) と呼んでいる (p. 49)。彼はインワを周囲15マイルの上品な都として述べており、またペグーに4ヶ月滞在した。

インワで彼は王家に属する白象を見たが、それは不体裁な白と黒以外の色でまだらになったはん点でほこりの色をした象だと、述べている。なお、ニコロ・ディ・コンティは当時のビルマの習慣について、一夫一婦制、また、一般に行なわれていた \*刺青, Tharanagon thon : bā : (仏法僧の誦唱)、棕呂の葉の書き物、ヤックの尻尾で作られた団扇、等現在のビルマ人にも親しみ深いものについてハーヴィも記述している (p. 79～80)。

1496年にもう一人のイタリー人 Genoese Hieronimo de Santo Stefano がペグーを訪れている。彼は価値のある品物を持ち来たって、それをビンニャ・ラン王に売りさばいたが、18ヶ月間支払いを待たされた、とのことである。ペグーのビンニャ・ラン王の宮廷へはもう一人のイタリーの商人 Ludovico di Varthema が訪れ、宮廷の壮観に深く印象づけられた。彼の記述では王は一つの大都会の価値以上のルビーを所有しており、ペグーの都はりっぱな家屋と王宮に豊かであり、その国には多くの象の棲む森林がある。

貿易が行なわれた品物はシエラック、白檀の木、すおう木、綿、絹、ルビー等であって、それ

---

\* ビルマ人の刺青については学報14号, 33～34頁。

らが王室の収入の主たる源泉である、とのことである。これら二人のイタリー人の記録の一つには、アーサー・フェアーも述べている通り、「ビンニャー・ラン王は雄大にして寛大、きわめて人道主義的なやさしい人物であったので子供すら彼に近寄って話しかけるほどであった。」とも述べられている。

Santo Stefano も Varthema もインワを訪れることができなかったが、そのことはモン族の王国を越えた地方は余りにも無政府な状態にあったことを証明している。

前述した (p. 77) イタリー人 Caesar Frederick は16世紀のビルマをわかりやすく描写している。Thomas Hickock によってなされたその翻訳は Hakluyt の “Principal Navigation” の中にも取入れられてある。その中で英人のうちで最初にビルマを訪れた Ralph Fitch についても記録されているが、彼は1587年と88年の二度にわたってビルマへ来ているが、往航の際に彼と彼の一行はゴアにてスパイ容疑でポルトガル人によって逮捕されるという不愉快な経験をもったことがあり、それ以後、ポルトガル人とのトラブルを避けるため罪に問われる疑いとなるような旅行日記をもち歩かなかったと述べられている。

また、Frederick は商業上の事柄について述べていることが多く、以下に彼の記述を Hall (p. 51~52) より紹介する。

彼らは \*コロマンデル海岸及びベンガルからペゲー、シリアム、バセイン等の港を経て下ビルマヘインド製織物品を輸入していたこと、並びに、それらの港とマラッカ、スマトラ、紅海等との間に貿易が行なわれていて、港々における税関吏のきびしい物品検査、河やその支流に沿って商品を国内へ輸送した方法、また、すべての商業上の取引が行なわれた仲介組織や外国商人に及ぼしていた一般情勢等をも述べている。彼は通貨問題にも注意を払い、\*\*ganza と呼ばれる銅と鉛を混合して造ったものを重量として用い、すべての支払いがなされた。

その標準額はインド viss (3.65 常衡ポンド) であって、100 ティカルに細分された。鉛を多く入れ過ぎることによる不正を避けるために試金分析者を公務員として採用することが必要であった。等々。

最後に、ロシアの商人 Nitikin は1470年頃、極東に旅し、ペゲーについて次の如く述べている。「ペゲーはかなり大きい商港であって、住民は主としてインド人の回教徒修道者である。」と記しているが、南部インド人とモン族の混血したタライン族とを見誤ったのかも知れない。しかし、ニティキンが関心をもったのはその商業社会であって、当時のペゲーが今から約30年以前のペゲー同様主として外国人によって占められていたものであることを示していることが推察される。

---

\* この経路の貿易には、インドの織物製品の他に、ウ・オンマウンでは (Vol. II, P.100), 薬品、釘、仏像等をビルマへ送り、ビルマからはチーク材、ルビー等を積出していた。そして、その貿易はかなり昔より行なわれていて、多数の熟練したアラビア人の船員が含まれていた、と記されている。

\*\* Ganza <Pāli kamsa = ビ Kaung : Laung :- Kyē = 鐘青銅。

その他のヨーロッパ人について

1596年にはオランダ人がジャヴァに上陸、相前後してデンマーク人も東洋に進出して、ポルトガル人と争った。数年にしてオランダ人はポルトガル人が東洋において占領していた大部分の領土を獲得した。ポルトガル人がそれらの領土を保持していくことができなかった理由としては、一つには彼らが組織的能力を欠いていることと、また一つには人口が比較的少なかったためであろう。その東方における領土も他の列強の手に委ねられざるを得なかった。新航路の発見はヨーロッパにおける勢力再分配の因となった。そして、オランダ人、デンマーク人もやがて当時世界最強を誇る海軍力をもつイギリス人によってインド方面より追放されるのである。

イギリスは1600年、東インド会社を設立するに及んで、それまで東洋における商業上の競争相手であったポルトガル人、オランダ人等を追放することに成功した。しかし、その後、彼らに代ってイギリス人の強敵として勢力を競うフランス人の出現となるが、今後の問題として扱うことにする。

## 参考文献

- U Hpō : Kyā : Myanmar Yāzawin Akyin : (1937)  
 U Tin U : Myanmar Naing-ngandaw Thamaing sanpya (1957)  
 U On Maung : Myanmar Yāzawinthat (1953)  
 U Min Han : Myanmar Naing-ngandaw Hket-laik Yāzawin (1937)  
               : Hman-nan : Mahā Yāzawindaw-gyi ; Vol. II  
 G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)  
 D. G. E. Hall : Burma (1950)  
 著者不明 : A Guide to the History of Burma.  
 ハーヴィ著 } : ビルマ史 (1943)  
 五十嵐智昭訳 }  
 アーサー・フエアー著 } : ビルマ史 (昭和18)  
 岡村 武雄訳 }  
 荻原弘明著 : ビルマにおけるキリスト教伝道の初期の歴史について (昭和30)  
 シュエ・ヨー著 }  
 国本嘉平次 } : ビルマ民族誌 (昭和18)  
 今永 要 } 共訳  
 U Maung Gyi : Tabin Shwe-hti : Wutthudawgyi ; Vol. 1. (1958)  
 吉川利治著 : タイ国概説 (1966)  
 Judson : Bur-Eng Dict. (1953)  
 U Tin Swe : Porāna Kahtā Abhidān (1954)  
 U On : Shwe : That-pon Abhidān (1956)  
 U Maung Gyi : Pāli Abhidān-hkyut  
 水野弘元著 : ペーリ語辞典  
 海外事情 }  
 調査所編 } : ビルマ要覧 (1970)